

ビジターセンター行事「野鳥観察会」

1 日時：令和4年1月16日（日）午前9時30分～11時30分

2 参加人数：7人

3 指導・助言：北川捷康 氏

4 内容

(1) 受付にて

①参加者確認

②検温

(1) 開会の挨拶（内野）

①本日の活動の概要説明

②講師の紹介：静岡県渡り鳥研究会、桶ヶ谷沼を考える会 北川捷康 氏

(2) 講話（北川）

① カモ類の基礎知識

- ・メスは地味な茶色、オスは派手な美しさをしている。
- ・寒くてもしもやけにならない。胴から足先へ向かう動脈に足先から胴に向かう静脈が絡んだ構造で、体外に奪われる熱量を減らすことができるワンダーネットという血管の構造のため。
- ・カモは雑食性だが、桶ヶ谷沼のカモの主食は水生植物（ベジタリアン）で潜らない。
- ・一回のカモの睡眠時間はほんの10数秒程度で、これを積み重ねて1日の睡眠時間を確保している。塵も積もれば山となる。
- ・カモの羽繕いの意味は、油を羽に塗りつけて体が水に濡れないようにするため。

② 冬の小鳥たちの数の変化について

- ・これまで6年を1サイクルとしてその中で野鳥の数が多し年と普通の年（多・普・多・普・普・普）が見られてきた。これは、エサの量の規則的な増減が原因していると考えられる。しかし、2018年以後パターンが変わり、全体的に減少傾向にある。環境の変化が原因と考えられる。

③ 減っている動物、増えている動物

- ・鳥以外に減り続けている動物もいる。減ったままの状態が続いているのは自然環境の変化と農薬など人為的による環境の変化が要因していると考えられる。
- ・講師の家のプランターには以前は見られなかったコハクオナジマイマイが見られる。（かつては九州・四国・中国地方にいたマイマイ）駆除しても駆除しても駆除しきれない。合計1万数千匹を駆除したが、終わりが見えない。
- ・タイワンタケクマバチは竹の節と節の間に産卵し成長する。台湾から輸入された竹ぼうきの中にいて日本で増えている。

(3) 屋外での観察

センターを出て、菜の花畑付近で観察をしたが、鳥はなかなか見られなかった。途中、ハシブトガラスの澄んだ鳴き声が聞こえた。ハシボソガラスというカラスがいるが、その鳴き声は濁った声なので区別がつく。例年なら菜の花畑の中でツグミが見られるはずだったが見る事ができずに残念であった。

沼の東の観察路を進み、鹿島神社方面に向かったが、この間もあまり鳥の姿を見る事ができなかった。A観察小屋につき、沼を見ると一部凍っていた。講師が当日の朝、下見をしたときにはカモの姿はあまり見られなかったが、ついた時間には凍っていないところでマガモをはじめヨシガモ、コガモ、カルガモ、カワウの姿が見られてよかった。参加者は持参した双眼鏡や講師のスコープでカモの姿を確認でき、観察会らしくなった。ここでは、それぞれのカモの特長とともに、アヒルの祖先はマガモでガチョウの祖先はガンである等の話を聞くこともできた。

藤棚の横にあるハゼの木にはその実を食べる鳥が集まってくる。現在は冬でその実はないが晩秋に来ればこの木では多くの野鳥を見ることができる、との説明があった。

森の観察路を抜け赤羽根線に出ると、メジロやセキレイ、コゲラ等の姿や鳴き声を確認すること

ができた。セキレイは道を案内する鳥と言われるように参加者の前方の道路上を小刻みに飛んでいた。コゲラはキツツキの仲間であるが、クチバシで軽やかにリズムを取りながら幹をつつくようすを見ることができた。メジロは全身が鮮やかな緑色をしており名前の通り目の周りは白かった。菓子のウグイス餅の緑色は元来ウグイスの色ではなくメジロの色であり、間違いでつけられた名前が現在一般化している、との興味深い話を講師から聞くことができた。

1時間余りの観察時間であったが、後半は多くの野鳥の姿を見たり鳴き声を聞いたりすることができた。

(4) 情報の共有

センターに戻り、本日観察できた野鳥の名前をホワイトボードに書き、確認した。

マガモ、カルガモ、ヨシガモ、コガモ、カワウ、トビ、キジバト、ヒヨドリ、メジロ、コゲラ、キセキレイ、ジョウビタキ、アオジ、ハクセキレイ、カワラヒワ、タヒバリ、ムクドリ、ハシブトガラス
合計18種類



講話のようす



講師の説明を聞く参加者



野鳥の姿を見るため観察路を進む参加者



鹿島神社近くで講師の説明を聞く参加者



A 観察小屋からカモの姿を観察する参加者



木の幹をつつくコゲラの姿を見て感激